校友時報

昭和50年7月21日
編集人兼発行所
秋田県能代市高塙2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所 大幡堂印刷所

―文化祭― 準備始められる

今年度は、創立50周年の意味を加えて、昨年の大幅縮少とは対照的に、盛大に行なわれる。それに先立って菅原生徒会長の命により、文化祭実行委員会が結成された。実行委員会では、テーマの必要が認められ、全校生徒を対象とするアンケートが行なわれた。その結果、大多数の支持を得て「翔卓」が決定と思われたが、あとから翔卓は造語であることが判明した。実行委員会で翔卓はとりやめになり、アンケートをやり直した結果「青春の汗」に決定した。

実行委員会結成される
全員参加をめざして

去る六月九日、文化祭実行委員会結成にあたって、生徒委員会は自主的参加を望んで委員募集の紙を全校諸所に掲示した。しかし、わずか一名しか応募者がいなかった。そのため、生徒委員会ではその構成方法を改めて、各クラスより一名以上を選出し、さらに文化局・体育局より一名ずつ、生徒会長・副会長をも加えて構成された委員長には三谷広樹君（三D）、副委員長には関史弥君（三A）と小嶋覚君（一C）が決まった。

第一回の実行委員会は、六月二十七日に行なわれ、能高祭の日程、基本方針、運営方針、予算等が決められた。また、今年は主旨をはっきりさせ能高祭を盛り上げるために、テーマを設けることも決定した。このことは、後日テーマ募集と共に全校生徒に報告紙が配布された。例年では文化祭準備は二学期になってからあわただしく行なわれ、そのため一部の生徒だけの参加という結果に終わっている。それを反省し、また今年は五十周年であることをも考慮して、一足早く準備が進められているわけである。現在、役割分担も細分化され、まずは順調な準備進行ということができるであろう。

テーマ「青春の汗」に

七月十四日に行なわれた二回目のアンケートの結果、今年度の文化祭のテーマは「青春の汗」――より高くはばたく――というのが三十七パーセントの支持を受けて決定した。

今年は早くから実行委員会が結成され、基本方針とともにテーマを設けるということも決定されたのである。

テーマは初めに全校生徒、職員から募集してその後、実行委員会で五つにしぼりその中からアンケートにより選んでもらい決定するというもの。各HRの実行委員を通してテーマが集められて、一回目のアンケートが行なわれたが、アンケートでは「翔卓」が一番多く支持を受けた。しかし、生徒会執行部のミスで、実はこの「翔卓」というのは提案者による全くの新しい造語であるということに気づかずにアンケート用紙を配ったのである。しかし、何しろ造語であるのでどうするのかということで、二度にわたり実行委員で話し合われた。「造語であったとしても我々の選んだものを自信をもって出そう」というのも出された訳であるが、「文化祭は社会へ向けて我々が開くものであるが、生徒だけの間にとどまってはならない。当然テーマにも一般性が必要である。それで造語である翔卓はとりやめにしたい」という執行部の意見に同意し、翔卓はとりやめになった。そして新しいテーマを再アンケートで決定することにした。

新しいアンケート用紙には、翔卓をのぞいた一回目のアンケートにあった四つと、執行部から翔卓のかわりとして提案された「青春の汗」の五つのテーマをのせた。なお、「青春の汗」というのには一回目のアンケートの結果を尊重して「翔卓」の意味となっている「より高くはばたく」というのをサブタイトルとしてつけ加えられている。

会長は再びアンケートを行なう前に混乱を避けるため、放送で再アンケートをやるに至ったいきさつを説明した。こうして再アンケートが行なわれ有効数八百一枚のうち二百九十九枚（三十七パーセント）の支持を受けて、今回の文化祭のテーマは「青春の汗」に決定した。

今まで、たびたびテーマのない文化祭もあったが、ただお祭りさわぎという感じで何か一つ肝心なものが抜けている気分がする。意図のない行事はお祭りにもならない。今回、この決まったテーマを五十周年記念や新校舎で初めての文化祭ですることを考えて、どのように生かしていくかは我々次第である。意義ある文化祭にし、我々の手でぜひとも成功させたい。

部説
学生のアルバイト
―夏休みを前にして―

夏休みを前に各自いろいろな計画を立てていることと思うが、休み期間中アルバイトの予定のある人も多いであろう。休み期間中と言わず、年間通してやっている人もいると思うが、学生がアルバイトをやるということはたいへん困難がつきまとう。一般には家計の事情とかで、どうしても自分で学費をかせがなければならない場合にバイトをしていたものであった。しかし、最近は、必ずしもそうでなくなってきた。バイトをしてステレオを買うとか、バイクを買うとか旅費をためるとかいう目的が多いようだ。ひとむかし前なら、娯楽のためにわざわざ学生がバイトをする必要はないとされていたであろうが、最近は学生も大量消費の生活を送るようになったのであろうか、学生たちは娯楽のための費用をかせぐために、バイトに出かけていく。昔は必要がさし迫っているという感じがするが、今はそれに比べるとバイトをするにも余裕みたいなものがうかがわれる。しかしそれは、目的がそんなにさし迫った事でないだけで、実際にやる内容は今も昔も変わらず自分の力でやるのである。

親たちはバイトについて相談を受けると、よい社会経験にもなろうと思い、案外簡単にバイトをすることを許可する。しかし、実際には一カ月くらいで一、二万円をかせいで、そんなに労せずして目的の品を手に入れる。よい社会経験になろうはずで許したバイトは逆効果になることも多いようだ。

今年あたりは不況を反映してかバイト難であるそうであるが、自分らの娯楽のための費用をかせぐバイトは今後もなくなるとは思われない。

しかし、我々がバイトへ安易に走るには問題がある。バイト先は社会の中であり、責任も我々自身にふりかかってくる。それに内容によっては我々の全く知らない世界へ顔を出すこともあろうし、そんな世界へ我々が入り込んで行かないということも断言はできないのである。

我々はバイトをするにあたってその目的とか仕事の内容をはっきり確かめておく必要がある。そして目的達成の段階で、やるべき目的もないバイトはやめるべきである。我々学生はいつまでもバイトをやっている必要はない。忘れてはならないことは、学校生活が、我々の本務であり、バイトが生活の主体となっては本末転倒である。夏休みを前にして、充実した生活設計を立てることが肝要であろう。

冷たいコーラはいかが!!

去る六月某日、我高の食堂にコーラ等の自動販売機が設置された。以前から生徒の強い要望であったため、一日に二百五十本程度売れるということだ。売り上げは食堂の収益の一部になる。始業前から放課後まで、かなり利用範囲は広いようであるが、なるべくなら午後三時ごろまでに利用してほしいとのこと。

なお、販売機での価格は、びん代を含まず五十円である。あきびんは教室、その他校内にすてておくと、校内が汚れるので必ず所定の場所へ返すようにしてほしい。

一部の生徒から両替機があれば便利だという声が聞かれた。学校側では検討中だそうだが、販売機だけでも故障が絶えないので、設置は困難のようだ。今後暑くなるにつれて、大いに活用されるであろう。

将棋同好会
インターハイへ出場

去る六月八日、秋田市民会館において、全県の高校将棋大会が行なわれた。本校からも将棋同好会が出場し、団体戦でみごと優勝した。試合では大将の豊田君が活躍し、三戦三勝で優勝の原動力となった。なお、今度八月十九、二十日の両日、長野県で行なわれるインターハイへも県代表として出場する予定である。去年もインターハイへ出場したが、ベストエイトまでもう一足というところで敗れた。今年こそは、全国優勝を実現してほしいものである。

全県大会の試合結果
一回戦は不戦勝
二回戦
能代二―一秋田工Aチーム
三回戦
能代二―一秋田高Aチーム
決勝戦
能代二―一秋田高専

将棋同好会は四十五年に発足し現在会員は十三名いる。毎日放課後に五時半、六時ころまで熱心に練習している。なお、旅費は規約上自費で行くことになるようだが将棋同好会では、早くクラブへ昇格し、生徒会の方から旅費が出るように強く望んでいる。実績から見て、早期実現が望ましい。

プール
完成間近

現在校舎の南側空地に建設中のプールが、七月二十日には完成する予定である。これは総工費千五百万円をかけてつくられ、用地面積約七百二平方メートルの広さをもつものである。二五メートルコースが六本と付属施設として更衣室（男女ともに同じスペースのもの）、シャワー室、機械室、管理室、浄化装置などが設置された立派なものだ。

このプールは、さっそく二学期から体育授業に使用されることになっている。来年からは体育必修科目として、六月下旬から夏休み前までと夏休み過ぎの数日間を水泳にあてる予定である。

またプールの完成にともない、有名無実化している水泳同好会の顧問の先生や部員の確認も必要になってくるのではないだろうか。

ズック登校許可なるか?
風紀委員会動き出す

去る六月十六日、ズック登校の是非とその理由を問うアンケートが風紀委員会によって全校生徒を対象に行なわれた。

その結果、ズック登校の許可を求める生徒が七十七パーセントにも上り、大多数の支持を得た。また、その理由としてズックが皮靴よりも安価であること、道路事情が悪いので履き易いこと、よごれた場合に洗濯がしやすいなどが圧倒的に多かった。

この事態を重く見た委員会では学校側の意見を聞いてみた。禁止理由は、内外の区別がなくなり校内がよごれること、つぶしばきなどでだらしなさがでることであり、校内につぶしばきがいる以上許可はむずかしいと学校側は強硬な態度にでた。

委員会では、これを説得する案として次のことをあげた。内外の区別の対策として登校用ズックには、なるべく色物を使用し、色物がない者は印（色ひも・マジックで線など）をつけ内外の区別を明確にする。また、つぶしばきなどには、月に七日間の取り締まり期間を設けて、原則として日に一度（八時～八時四十分）の抜き打ち的な検査をする。違反者は氏名を記入され、それを二校時休み時間に放送する。これによって、違反者数が増加するような場合は、ズック登校はその月でもって中止する。違反者数が減少、またはいない場合は次の月もズック登校を継続する。このように毎月一週間のテスト期間を設けてその結果により、その度中止するか続行するか判断する。

この具体的な案をもって生徒委員・風紀委員・執行部の代表二名ずつ計六名で学校側にズック通学の許可を要求する予定である。

今後の成り行き注目される

アンケート以来、風紀委員会による一般生徒への呼びかけが全くなかった。そのために一般生徒の意見は反映されなかった。これはある意味で風紀委員会の独断ともいえるのではなかろうか。また、その風紀委員会内でも実質的な活動者がわずか三名であることも見逃せない事実である。これは、ほとんどの生徒が無関心であるゆえに自分たちで案をまとめて提案するという形式をとったということである。しかし、そうすることが妥当だったのだろうか。生徒の意見を反映させるのが委員の役目なのだから、もっと全校生徒が立ち入れるような、その案が全校生徒で作り上げられたものになるように考慮するべきだった。それにより、学校側への要求もより強力なものになったにちがいない。

また、学校側では、内ズックのつぶしばきがある以上はズック登校を認めないと言っている。しかし、それだけをあげるのは偏見ではあるまいか。現に校内での白ズック履きは完全に守られている。この事実は風紀委員会にとっても全校生徒にとっても強い武器である。現在のような校舎周辺の環境では雨が降ればドロだらけ、晴れれば晴れるでホコリだらけになる。こんな状態でつぶしばきをする者がいたとしてもごくわずかだろう。その数人のために安価で履き易いズックを本当に必要とする生徒を無視するならば、学校側は決して正当とはいえなくなってしまう。

この問題は、靴の自由化にはまだ少し遠いが、その成り行きは大いに注目される。なぜなら、このあとにつかえている制帽の自由化、あるいはいずれ大きな問題になるであろう制服の自由化などにも関連してくるからである。

論点

▼今年になり県内の交通戦争激化理由の一つとして、暴走族の存在がある。夜な夜な集団で車を乗り回し、道路沿線にはた迷惑な轟音をまき散らす。交通ラッシュが拡大しつつある中で制限速度をはるかにオーバーして疾走したり、無理な追い越しや急停車などを繰り返したりする。二、三人が組んでスピードを楽しむだけにとどまらず、集団走行や暴力ざたを起こす彼らの心理はいかなるものなのか。

▼最近中学生、高校生が集団で非行化するケースが多い。それもいわゆる中流家庭のごく普通の生徒である。これらの非行少年、非行少女と暴走族との共通点は、彼らの多くが気の弱い内気な若者たちだということである。一人では何もできないが、集団化すると大胆になる群集心理が彼らを動かす。多数の力を借りて虚勢を張ろうとするのである。それゆえ「地獄天使」とか「ダニヘビ」などという聞くも恐しい名前をつけているグループが多い。

▼めざましい経済の高度成長により、現在は自動車やオートバイなどはそれほど苦労せず手に入る。その上、暴走族などが増加する原因として、免許制度・交通法規が甘すぎるということもあげられる。感情のおもむくままに行動しがちな若者が、軽乗用車の二倍もの排気量を持つ大型二輪車などを運転するとなれば、暴走族へと突っ走るのは防ぐすべもないといえるだろう。

▼現在、警察当局によって暴走族の撲滅運動が活発に行なわれている。その成果があってか、各都市のグループの中で解散したものも多い。しかし今までスピードに狂っていた若者が簡単にそれをやめることができるであろうか。やめたとしても、スピードに酔いしれることでまぎらわしていた欲求不満や孤独感をこれからは何によって吐き出すのであろうか。ここにまた新しい問題が芽ばえるのではないか。